報告番号	※ 乙 第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	日本における動物犠牲の狩猟文化的意義 ― 統計・狩猟活動・狩猟儀礼 ―
氏　　名	鈴木 良幸

論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的は、狩猟をおこなう際の制度的枠組み、捕獲対象と量的変化、捕獲のための技術とその心性、現代に伝承される動物儀礼との関係を分析し、日本における動物犠牲の狩猟文化的意義を解明することにあった。そのために、①狩猟を規制する制度と統計データの傾向と画期、各鳥獣の捕獲数の地理的分布を明らかにした上で、②フィールド・ワークによって、大物猟のセンターであった宮崎県西都市のイノシシ狩、罠猟、飼育と競り市の具体的方法と歴史的変化を検討するとともに、③語りによって、狩猟活動における「災い」と「悪い行為」に関する世界観を分析し、地域共同体の儀礼としての動物犠牲（オニエ）との関係性を明らかにした。その分析をもとに三遠南信地方のシカウチ儀礼と宮崎県西都市の銀鏡神社大祭の狩猟文化的意義を考察した。

第Ⅰ部では日本の狩猟文化にはどのような傾向と画期があったのか、その動態を知るため、制度の変遷および狩猟統計データをまとめ、分析をおこなった。

制度からのアプローチでは、明治以降の「官報」データを収集し、法令の変遷、狩猟免許による規制（猟具）、狩猟期間・時間、捕獲可能鳥獣の４つの側面から検討を加えた。「狩猟統計」データは約 100 年分を収集し、狩猟人口、総捕獲数、種別の捕獲数、種別捕獲の地理的分布について、背景となる社会状況を加味して分析をおこなった。

その結果、明治以降の日本の狩猟の画期は、①「乱獲期」、②「戦時狩猟体制期」、③「経済成長期」、④「害獣駆除期」の４つの時期に分類できることが明らかになった。また、捕獲の地理的分布を検討した結果、「東の羽物、西の大物」という地理的分布が示された。「東の羽物」はカモやキジ、ヤマドリなどの大型鳥であり、「西の大物」はイノシシやシカが顕著であった。宮崎県は大物猟の最も盛んな県の一つであり、大物猟の北限はおよそ長野県あたりにあることが示された。さらに、鳥類および小型獣の捕獲数の激減が示され、狩猟文化の伝承の危機、即ち野生動物との文化的関係性の喪

失の危機という転換点を迎えていることが明らかになった。

第Ⅱ部では、宮崎県西都市銀鏡地域のイノシシ文化について、現地調査をもとに論じた。宮崎県は大物猟のセンターであり、銀鏡地域は県内で最も狩猟が盛んな地域の一つである。現地のイノシシと人との関係を、銃猟、罠猟、飼育・流通の３つの側面に分けて論じた。

第五章「狩猟文化の地としての西都市銀鏡」では、銀鏡地域がイノシシ狩の適地であることを論じた。その理由は、豊富なエサがあるイノシシの生息適地であること、耕作地が限られていること、交通の便が悪く産業に不適の地であったこと、「農具としての鉄砲」を各家が所有していたこと、である。

第六章「銀鏡地域のシシ狩」では、イノシシの仲間狩の実際を論じた。狩人には、地形・獣道・寝床・射場などの知識やシシ探索の技術を身につけること、および狩の状況を総合的に判断する「狩勘」の習熟が求められる。捕獲のチャンスは猟犬がつくりだしており、狩の前提づくりと仕留めに人が力添えをすることで狩が成り立つことが明らかになった。一方、狩猟活動には厳格な組織と役割分担がみられ、多くの取り決めがあった。特に分配の取り決めは、非常に厳密におこなわれていた。

第七章「銀鏡地域の罠猟」では、小鳥から大型動物にいたる罠猟について論じた。そのために罠の具体的な構造、捕獲対象、設置場所、設置者を検討した。その結果、自宅周辺の罠は小鳥を対象とした子どもと高齢者の仕事で、その獲物は日常のタンパク源とされたこと、奥山の罠は狩人が担い、猟果は個人の取得とされたが、大型動物のみ近隣への分配がなされたことが示された。但し、分配の取り決めはみられなかった。また、罠の工夫は設置者の個性であった。しかし、シシ罠には猟犬がかかるため、経済的必要と倫理観とのあいだで揺らぐ狩人の姿がみられた。一方、罠には儀礼がみられなかった。

第八章「イノシシ飼育と競り市」では、狩人や生産者による多様な関係のイノシシ飼育、その流通システムとしての競り市の発展を論じた。西都市でみられたのは、人家にやってくる「半飼育」に近い子イノシシや、狩人がおこなう成獣までの「一時飼育」、生産者による大規模「飼育」（繁殖による代々飼育）であった。生産者のひろがりは、南九州を中心に長崎県や高知県にもおよんだ。そのシステムには野生イノシシを都市の人々が利用する一つの可能性が示された。また、屠りにともなう儀礼はみられなかった。

第Ⅲ部では、狩猟活動における狩人の心性と地域共同体の動物犠牲（オニエ祭）との関係を論じた。その分析を通して、三遠南信地方のシカウチ儀礼、および宮崎県西都市銀鏡地域の銀鏡神社大祭の狩猟文化的意義を明らかにした。

第九章「狩猟活動における『悪い行為』と『サスライ』—活動の『神事性』との関係において—」では、狩人の語りをもとに狩猟活動における「悪い行為」と「災い」、およびその浄化の世界観を分析した。活動中の悪を浄化する原動力となったのは、家族や集落に「きれいな獲物」をもたらすことであった。きれいな獲物をもたらすために狩猟活動は浄化され、同時に獲物自体は斎（いつ）き、いつくしまれることによって神格化される構造が明らかになった。これは地域共同体の祭りとしてオニエが共食されることとの関係を示していた。

第十章「共食儀礼としてのカクラ祭と狩に関する神」では、集落にもたらされた「きれいな獲物（オニエ）」はどのように扱われるのかを考察するために、集落での共食の事例を検討した。それにより、小集落でおこなわれるカクラ祭は、ニエ狩の猟果を全戸で共食する祭りであることが示された。また、共食にはオニエを食べることの厳格な儀礼化がみられた。

一方、銀鏡地域ではコウザケ、カクラ神、山の神と呼ばれる神があり、いずれも狩の神であるとされる。それぞれの神の差異を明らかにするために、狩人の儀礼および伝承される物語を考察した。その結果、それぞれの神は山の神が性格を変えてあらわれたものと考えられることが示された。

第十一章「シカウチ儀礼の狩猟文化的意義」では、三遠南信地方に伝承されるシカウチ儀礼の狩猟文化的意義を考察した。各シカウチ伝承地区の事例を示した上で、儀礼構成要素をまとめ、伝承地区のなかでもっとも複合的な次第をもつ小林地区をとりあげた。小林地区の検討をとおして、シカウチ儀礼の狩猟要素と実際の狩猟活動の関係を検討し、シカウチ儀礼の狩猟文化的意義は①狩猟活動プロセスを模擬的におこなう儀礼であり、②山の神との関係でおこなわれると考えられること、③地域共同体の共食儀礼であること、が明らかになった。

第十二章「銀鏡神社大祭の狩猟文化的意義」では、宮崎県西都市銀鏡地域の銀鏡神社大祭をとりあげ、その狩猟文化的意義を論じた。オニエがどのように扱われるのかを問題とするために、大祭の奉仕者がどのような奉仕をおこなうのかを検討した。その結果、構成要素は「シシを食べる次第」「神楽の次第」「模擬狩猟の次第」の３つに

分類することができ、①オニエは神格であるとされていること、②厳格に調理して食べる次第が組み込まれていること、③オニエに斎く（いつくしむ）組織とその行為があること、が示された。大祭はオニエを受けとる地域の者が精進潔斎し、斎き、神楽を奉納し、共食する儀礼として捉えることが可能であることが示された。

従来の動物犠牲論の視点では、動物を殺すことに焦点があてられてきた。しかし、狩猟活動のプロセスとその心性に注目することで、異なる角度から動物犠牲の意義が照射されたといえるだろう。